
名無しの国に咲く花の

水芙蓉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

名無しの国に咲く花の

【Nコード】

N5609T

【作者名】

水芙蓉

【あらすじ】

私にはたった一つだけ大事なものがある。それを守るためなら、なんだってするだろう。たった一つの願いを胸に、成り上がりの残忍な王の後宮に入った彩華^{あやはな}。その願いを叶えるために王の取引に応じる。罪深い契約の先にあったのは……。思い切りシリアスに進行する予定です。

1 閻帝と女

美しい女だ。

手の平で掴むことのできそうなほどに華奢な首元に剣を突き付けながら、王は眼下に膝まづく女を見下ろした。

女は怯むことなく、まっすぐに見上げてくる。

床に届くほどに長い髪は濃い茶色。瞳は雨の予兆を覚えるであろう灰色の空。

派手派手しい彩りは、そこにはない。

あらゆる国から集められた美姫がひしめくこの後宮にあっては、その容貌は突出したものではないかもしれない。

しかし、剣に怯えた様子もなく、閻帝と呼ばれる己を見つめる女は息を飲む美しさだった。

「……剣には屈せぬか」

誰もが、感情が見えぬ、という己の声。

女が己の意に背くことへの怒りも、女の美しさへの感嘆も、もちろんそこに含まれることはない。

全ての感情を取り払ったそれは、事実を確かめるためだけの眩きとなって、女に届くだろう。

「命は惜しくはございません。故に……剣は恐ろしくございません」
女は答えた。

その声もまた感情の見えぬものだった。

僅かにも震えず、凜と響く。

「……ほお？」

王は瞳を眇めた。

触れるか触れぬかだった剣を、ぐつと首筋に押し当てる。

女は身じろぎ一つしなかった。

その言葉が真実であるというように。

王は、剣を僅かに引いた。

真っ白な首筋にスツと紅の線が描かれる。

だが、女は微動だにせず、王を見つめていた。
しばしの沈黙。

滴ることのない紅の線が、女の美しさを引き立てる。

「命は惜しくはございませんが……それでも、望みというものが2つございます」

やがて、女が口を開いた。

耳に届いた声に、己が女に見入っていたことに気がついた。

女の様子に変わりはない。

王が女の美しさに、一瞬とはいえ我を忘れる程魅入られたことに気がつかぬようだった。

物慣れた女ならば、そこにつけ込む術もあろうに。

「望み、とは？」

しかし、女は取引を持ちかけた。

王の望みを叶えたくば。

その望みを叶えよ、と。

「正妃の座を」

女は言った。

後宮に住まう女の多くが望むであろうそれ。

この国の女としては最高位だ。

正直に言えば、少々落胆した。

この女も、他の女と変わりない。

「そんなものが欲しいか」

嘲りを隠さず言えば、女は恥じ入る風もなく。

「そんなものが私には必要なのです」

そんなもの……と答える。

そして、相変わらず、目は逸らされない。

「一生とは申しません」

淀みのない、迷いのない瞳。

こんな風に見つめられることは、ほとんどない。

忠誠を誓う臣下も。

閨で愛を囁く女達も。

王の視線を受け止めきれずに、逸らして俯く。

揺れることなく注がれる視線。

むしろ、今この時に、逸らしたいと思っているのは己の方かもしれない。

王は思った。

だが、逸らさない。

「5年」

女のいう年月が何なのか、一瞬意味を捉え損ねる。

しかし、すぐに気が付く。

「5年の間、私に正妃の座をお与えくださいませ」

そう、期限を付けたのだ。

期限付きの正妃の座。

そんなもの、聞いたことがない。

そして。

「貴方様の寵は望みません」

そうもはつきりと告げられる。

「欲しいのは、地位のみ」

闇帝は剣を降ろし、鞘に納める。

女は、動かない。

ひざまずいたままだ。

「もう一つはの願いとは何だ？」

2つ、と女は言った。

それに興味があった。

期限付きの身分を望む女は、あと、何が欲しいのか。

「どうか、この度の件で人を殺めて下さいますな」

だが、王の耳に届いたのは、女が欲しいものではなかった。

「何？」

聞き間違いか。

「誰にも、命を落として欲しくはないのです」
確かに女はそう言うのだ。

もう一度、剣を構えようかと思った。

己は闇帝。

人によつては、暗黒王とも血塗れ陛下とも。

そう呼ばれる軌跡を描きながら生きてきた。

そして、今の地位を手に入れたのだ。

その王に、人を殺めるなと望むのか。

「……それが私の2つ目の望みです」

女はやはり王に怯むことなく……そして、その美しい瞳は切実な
彩りを加えて訴える。

これは、この女の本意だ。

そう感じた。

正妃の座が欲しいという。

そんなもの、と言いながら。

人を殺めるな、という。

女が手に入れようとする正妃の座は、後宮の女達が誰を殺めても
手に入れたいと望むものだろうに。

「そんな甘いことでは、正妃の座などに就いたところで1年と持た
ず殺されるぞ」

女に抱いた不思議な感傷と疑問を胸にしまい、王はそうとだけ告
げた。

「……もしそうならましたら……どうか、残りの4年は影武者でも
お立て下さいまし。欲しいのは、正妃の座に在る私の名のみ」

その答えが気に入った。

女が何を考えているのかは知らぬ。

だが。

「……面白い女だ」

そう面白い。

闇帝はひざまずく女の腕を取り、立ち上がらせた。
どれだけの意思で闇王と向き合っていたのか。

強張り易々と立ち上がれぬ身体に、初めてそれが決して強かなばかりの女ではないことに気が付く。

がくりと女の膝が崩れかけるのを、力づくで持ち上げた。

「いいだろう」

女は王を見つめた。

王は女を見つめる。

この容貌は、多分東方の女。

あの地方は、未だ王への謀反を企む者達が少なくない。

その一端を担う女か。

それならば、それで良い。

女が命が惜しくないというように。

王も、また、死を恐れない。

「お前の望み二つ……いや、お前が殺された後の影武者の件を合わせて3つ。確かに聞き届けよう」

言いながら、引き寄せられるように目についたそこに顔を寄せる。

女の白く細い首筋。

己の剣が描いた小さな傷に這わせれば。

「……っ……」

ビクリと女は身体を揺らした。

渡り合った女の小娘のような反応に、湧き上がった笑いを喉で殺し、王は女の腕を離れた。

一瞬揺らいだ身体は、しかし、しっかりと立ち、王の前に美しい立像を見せつける。

「……さあ、言え」

促す声に、女は大きく呼吸をし、王の望む言葉を口にした。

2 謀が始まる

その国は『名無し』と呼ばれている。

古来よりの強国や、台頭する新興国を、あまねく打ち砕きひざまずかせた姿なき大国。

消え失せた国々さえも、名のみは歴史に遺すのに。

この世界の大半を領土としながらも、未だ地図には『名無し』とある。

その国の王たる男が、国に名を与えぬからだ。

『名が必要ならば好きに呼ぶがいい』

男はひれ伏す者達を前に、そう告げた。

『俺のことを闇帝と呼ぶように』

陰で囁かれるそれを、低く響き渡る声で明るみに晒す。

『暗黒王と呼ぶように……国もまた好きな名で呼ぶがいい。いずれ、相応しいものがその名になり得る』

その言葉に、誰一人、何一つ、異議を唱えられる者はなかった。

だから、この国に名はない。

そして、王の名も誰も知らない。

王がどこで生まれ、どのように育ち、今ここに至るのか。

それらは全てが謎。

いずれかから現れ、無法に闊歩する荒くれ者共を束ねたことが伝説の始まり。

やがて、多くの国王達の首を自らの剣で刎ねることで、領土を広げその玉座を手に入れた。

それらが、知り得る闇帝の全て。

その謎多き王の後宮に、彩華があやはな一室を与えられる身となって3カ月ばかりが経つ。

「月の方様」

ここでは彩華はそう呼ばれていた。

彩華の住まう場所として与えられた部屋が、『月の室』^{むろ}と呼ばれる場所だからだ。

あの王は、国に名を与えぬだけでなく。

己の名を明かさぬだけでなく。

今在る名まで奪うのだと。

初めて『月の方』と呼ばれた時には思ったものだ。

己の名の、親しい者達の声で呼ばれる響きは好きなのに。

そうも思った。

だが、考えてみれば、ここには優しげな声で名を呼ぶ者などいないのだ。

冷たいばかりの者達に『あやはな』と呼んでもらいたい訳もなく、『月の方』という呼び名も馴染めば、むしろ出身国や身分を知らしめるものではない分、気楽といえば気楽だ。

3か月という時間は、新しい名を受け入れるにはちょうど良い時間だった。

言い換えれば、この3か月間に彩華ができたことは、その呼び名に慣れることで精いっぱいだった。

それと、もう一つ。

その二つ以外は何一つとしてできず、ただ、ここに存在しているだけだった。

それが、この数日で大きく変わろうとしている。

「陛下よりお届けものでございます」

部屋を訪れた使者の言葉と、恭しく差し出された箱に、彩華は眉を寄せた。

またか。

さほど広くもない室の一角を占める箱達に、思わずため息が零れる。

これも、暗黒王との謀の一つとは言え、毎日のように届く贈り物に正直なところ彩華は辟易していた。

「月の方様」

彩華の世話をしてくれている鈴風すずかぜという女が、紐解かぬのかと尋ねてくる。

「その辺りに置いておいて下さい」

彩華は答えた。

最初に届いた一つは開けてみた。

中には見たこともないような煌めきを湛える宝石があしらわれた首飾りが入っていた。

それは、彩華の首を一瞬と飾ることなく箱へと戻され、2度目の光を受ける機会は今のところ訪れていない。

「ですが、これはドレスでございましょう。きちんと手入れしなければ形が崩れてしまいます」

彩華より幾つか年上だろう娘は、大きな箱を持て余しながら、もつともなことを言う。

声音には明らかな非難が混じっていた。

年頃の娘にとっては、美しいドレスや宝石が目の目を見ることがなく、箱の中に眠ったままになっていることが、なんとも口惜しいだろう。

ましてや、これらは恐れ多くも王からの贈り物だ。

この侍女にしてみれば忠誠心も手伝って、彩華の態度に憤りさえ感じているのかもしれない。

「……興味ありません」

だが、彩華はきつぱりと言い、積まれた贈り物から目を逸らした。鈴風が口を開きかけたのが視界の隅に見える。

非難か、小言か。

いずれにしても、聞きたいものではない。

分かっているのだ。

本来であれば箱を開き、その美しさに感嘆の声の一つも上げ、王に感謝の文でも送るべきなのだろう。

しかし、彩華はそうしない。

したくないし、しなくて良い。

これらの贈り物は、王の小道具だ。

しかし、聞きたくないながらも聞くしかならうと待っていた鈴風のどんな声も、聞こえてこなかった。

「そう言うな」

代りに背後から聞こえてきたのは、最も聞きたくない男の声だった。

慌てた仕草で、侍女が膝をつく。

彩華はそっと深呼吸をしてから、振り返った。

「月の方のご機嫌はいかがなものか？」

王が部屋の入口に立っていた。

名のない国の、名のない王。

闇帝、暗黒王……それから、血塗れ陛下だっただろうか。

幾つとある通り名は、今や、揺るがぬ王座に君臨することに敬意を込めて。

男がそこに就くために、この世界に屍の山と、血の海を築いて来た、その生き様に畏怖を抱いて。

祈るが如くに、そっと囁かれる。

しかし、容貌だけ見てみれば、男のそれは闇ではなくむしろ光だ。銀とも金とも見える光を受けて弾く髪も、青空を思わせる鮮やかな瞳も。

輝かんばかりなのに。

「今しがた悪くなったところです」

答えながら、鈴風が持ったまま置き場に困っている、先ほど届いた箱を見遣る。

「今しがた、な」

呟きつつ、王が彩華へと近付いてくる。

光輝く王……だが、この男の纏う空気は、通り名の通り闇に満ちている。

「開けろ」

王は、鈴風に命じた。

鈴風は恭しく礼をした後、手元にあった箱を開ける。中から出てきたのは、明るい空色の絹。

鈴風がそれを取り出し、立ち上がって広げて見せる。

ドレスだ。

極上の生地、金糸や銀糸で細かな刺繍の施された、一目で名のある者の逸品と知れる見事なものだった。

だが、彩華の心は僅かにも踊らなかった。

演技ではなく、事実として。

「陛下」

ドレスから目を離し、目の前の男に呼び掛ける。

男はドレスを見てはいなかった。

彩華を見ている。

剣を突き付けた時と同じ、何の感情も見えぬ瞳で。

「これは、何でしょう？」

尋ねれば、王は眉を上げた。

「気に入らぬか？」

気に入らぬも何も。

「……何もいらぬと、何度も申し上げております」

この嘘で塗り固められたやり取りの中、彩華が幾度と口にするこの言葉だけは常に本当だった。

「物でしか……お前の気を引けぬ俺の心中をもう少し慮って欲しいものだ」

王は嘘で答えながら、彩華に手を伸ばす。

彩華はそれを避けて王から離れながら、もう一度言う。

「何もいらぬのです」

ものなど。

何かが手に入ったところで、私の願いは叶えられない。

「何も？」

王の手が、遠ざかろうとする彩華の腕を掴む。

彩華は王に向き直り、いつかのようになつて見つめた。

「……ドレスも宝石も」

いない。

「陛下の御心も」

私が本当に欲しいものは、王に告げたそれでさえない。

それは、欲しいものを手に入れるための、手段に過ぎない。

私が欲しいものは、王の貴方でも与えてはくれない。

だから。

「何もいりません」

「月の方様！」

彩華の無礼な態度を見かねた鈴風の、きつい呼び声が聞こえる。

微動だにせずに、それを聞き流しながら、やはり王を見つめ続ける。

「黙っている」

王が侍女を抑え込む。

視線は、彩華に注がれたままだ。

これが恋焦がれる者の瞳だなんて。

見つめられる彩華には違うと分かるのに。

世間では、既に噂になり始めている。

……闇王が一人の妃にご執心だ、と。

「陛下、そろそろお戻り下さい」

部屋の外から、声かけられる。

「もう少し待て」

王は返事を返しながら、これ見よがしに彩華の腕を引き抱き寄せた。

彩華はそれには刃向うことなく、大人しく胸元に納まる。

「……物では気が引けぬなら……どうしたものか」

ぐっと抱き寄せられ、囁かれる。

演技とは分かっているながら、闇王と呼ばれる男の懐の深さと温か

さに身が震えた。

「このようなつまらぬ身がお望みならば、一言お命じになればいい……貴方にはそうする力がありになる。私には拒むことができない……力が」

彩華は囁き、王の胸を押した。

いつもならば、それですぐに離れるのに。

王はそれをも包み込むように、彩華を更に抱き寄せる。
そして。

「……着飾れ」

囁く。

誰にも聞こえぬように。

「俺の寵妃に相応しく」

耳朵に唇を触れて王が囁く。

「俺を誑かす程に」

それは、契約の条項を読み上げるかのように、淡々と。

王は彩華を離れた。

「……また、来る」

そして、名残惜しいとでも言うように、ゴツゴツとした手のひらで頬を撫でてから、背を向ける。

その背を見送り、彩華は目を伏せた。

本当は、この場にへたり込んでしまいたい。

私は、あの王と渡り合えるような、強い女ではない。

だが、やり遂げねばならない。

そのために、ここ在るのだ。

ズキン、とこめかみ辺りに疼痛が走る。

あの日から。

王と罪深き契約を交わしたあの日から苛む頭痛。

これが罰ならば、いくらでも受け入れよう。

だから、どうか。

私の持ち得るものは、決して多くはない。

母から受け継いだ、それなりに美しいのであろう容貌。
優秀な魔女だったという祖母が遺した幾つかの秘薬。

でも、そんなもの、どうでも良い。

いつだって、捨ててしまえる。

私が大事なのは。

何にも代えがたいのは。

たった一つだけ。

それを守るためなら、私は何だってするだろう。

3 光の訪れ

テーブルの上には、ようやく日の目を見た装飾品が所狭しと、しかし、すべてがきちんと見えるようにとの配慮の元に、整然と並べられている。

その脇には、箱から取り出された何着ものドレスが、これも王からだと侍従が持ち込んだ移動型の、だが、手抜きのない美しい細工の施された家具にきれいにかけられている。

彩華は知らなかった。

一つ一つは美しいそれらが、こうして一所に集められると、お互いが主張し合って毒々しさを放つまでになるのだということ。

まるで、この後宮のようだ、と思う。

居並ぶ美しい姫君達は、お互いに競い、憎み、妬み……美しさの中に、毒を積もらせていく。

ズキン、と、また頭痛がした。

こんなもの、捨ててしまいたい。

だが、着飾れと命じる男の声が耳に残る。

ならば、これらを身につけねばならぬのだ。

華々しく着飾り、姫君達と同じように毒を身の内に蓄積していくのか。

いいえ、何を今更、だ。

着飾ろうが、着飾るまいが、私の内は、ここにいる姫君達の誰よりも、毒に満ち満ちている。

ズキン、ズキンと、脈動のリズムで頭痛がする。

彩華はソファに半身をうつ伏せた。

「……彩雪……」
あやゆき

眩くのは、たった一つの抛り所。
それだけが、彩華の真実だ。

小さな音がして、どこかに飛んでいた意識が戻ってくる。

どうやら、少しうつらとしていたようだ。

寝返りを打つばかり夜。

ふと意識を失うが如くのうたた寝。

最近はそのばかりでまともに眠れていない。

彩華は顔を上げ、音の行方を探った。

鍵のかけていないバルコニーがそっと開けられて、ひょっこりと女性が顔を出した。

彩華はあからさまに眉を潜めて見せるのに、彼女は何食わぬ顔で部屋へと入り込んでくる。

「本当にすごい数ね」

軽やかな声で、素直な感嘆を口にする。

彩華はソファから立ち上がりもせずに、女性を無言で拒否した。

しかし、彼女はそんなことはまるでお構いなしに彩華へと近付いてくる。

その姿の華やかさに耐えきれず、彩華は目を逸らした。

この後宮で最も美しいと言われる女性。

そして、王が最も寵愛する妃。

眩し過ぎるその方は。

「光の方様」

彩華はドレスや宝石を順々に目で追いつつ、かといってさほど興味がある風でもない方の名を呼んだ。

その輝くばかりの美貌に相応しい名は、もちろん、この後宮内での通り名だ。

「その呼び名は嫌いよ」

彩華より2つ、3つ年下だろうと思われる女性はきっぱりとそう

言った。

さやゆめ
「清夢」

何度も聞いた名を、また彼女は名乗る。

「光の方様」

敢えて、彩華はそう呼んだ。

彼女を受け入れるつもりのない意思表示だった。

「もう、来ないで下さいと申し上げましたでしょう」

そして、そうもはっきり告げる。

だが、光の方はにっこりと不敵に、そして無防備にほほ笑んだ。

「また来るって言ったでしょう」

美しいというのは、こういう方のことを言うのだろう。

あの王でさえ、魅了されたと聞く笑顔は、数日前ならば見据えることができた。

だが、今はできない。

彩華はそれほどに強かな女ではなかった。

「……あ、輝陽石」

美貌の寵妃は、テーブルに並んでいたうちの一つを手を取った。

宝石などとは無縁に生きてきた彩華には、それらの名などどれ一つとして分らない。

今、光の方が眺めているのは、無数にも思える細かい黄色の石が銀の糸で複雑に結び合い、絡み合いながら

光を放つ首飾りだった。

「とても珍しい石よ。こんなにたくさんを施したものは初めて見るわ」

彩華は答えない。

興味はない。

どんなに高価なものであろうと、どんなに美しいものであろうと、それは、彩華の救いにはならないのだから。

「……陛下のお召しをお断りしたのですって？」

首飾りをテーブルに戻しながら、光の方が呟くように尋ねてきた。

答えずに、このまま黙してやり過ごしてしまいたい。

これに答えたその時から、全てが嘘になる。

本当の始まりになる。

だが、彩華は口を開いた。

「お召しなどございません」

光の方は、今度は青い石の腕環を手をしている。

彩華を見るのを戸惑うような、不自然な動作だ。

「お召しはなくても……ここへは、よくいらっしゃるのでしょうか？
陛下はあまり後宮にはいらっしゃらない方だもの。二日と開けず
に後宮にいらっしゃるなんて、今までにないご執心ぶりだと後宮中
が驚いているわ」

あの王は着々と謀を成していく。

欲しいものを手に入れるために。

誰も彼もを欺きながら。

自ら一人を信じながら。

彩華もそうならねばならない。

だから、答える。

「後宮に入った身です。陛下のお召しがあれば、どこへなり参ります……確かに、ここへはよくいらっしゃいますが……何かの気まぐれでしょう。お召しなど、ありません」

光の方は俯いた。

「……貴女が頷くのを待つって……そう、宰相達に零されたんですって」

嘲笑いたい気分だった。

己を。

王を。

欲しいものを手に入れるために手段を選ばぬ者達を。

「私の時は……無理矢理だったわ」

小さな小さな告訴に、彩華は目を伏せる。

彼女の言葉に感情が揺れ動かぬように。

「ここしばらく陛下のお召しはないの」

どんなに己を蔑もうと。

謀は始まったのだ。

それを選んだのは、彩華だ。

「……ほっとしてるわ」

あとには引けない。

「ごめんなさい。こんな話しをしたいのではないのに」

光の方は顔を上げた。

何故と問いたくなるような、親しげな笑みを浮かべて

「あのね、花壇に新しい花が咲いたの。初めて見る花なのだけど、
貴女なら知っているかと思って」

無邪気に問い掛けてくる。

「毒でなければ……部屋に飾りたいの」

彩華は頷いた。

「近いうちに、見て参ります」

今はまだこうして優しく話し掛ける光の妖精。

貴女は、謀が成し遂げられた時もそうやって微笑むだろうか。

4 醜い女

夏の晴天を思わせる鮮やかな色彩の絹。

いつか、王から贈られたドレスを、彩華はその日初めて身につけた。

着終えて鏡の前に立つ。

着替えを手伝っていた鈴風が、背後で何らかの吐息を吐いたことに苛立ちを覚えながら、無言で鏡の中の己を蔑視にも似た……いや、蔑視そのものの眼差しで眺める。

作り上げられた貴婦人がそこにいた。

今だかつて、彩華が身に付けたことのない、優美な流線を描くドレス。

しかし、後宮で身につけるに相応しい淫靡さも兼ね備えているようないな。

彩華が身につけたのは、この季節ならではのノースリーブのドレスだった。

寒さが勝る地方で暮らしてきた彩華には慣れない形だ。

しかも、腕だけでなく、胸元、肩、背中を大胆に晒す薄手の生地には、どうしようもない羞恥を覚えずにはいられない。

腰の細さから丸みまでを見せつけるかのように身体を辿る空色は、やがて足元に向かってドレープを描いて水面の如くに揺れる。

布地を押し上げつつ、谷間を覗かせんばかりに開かれた胸元に、彩華は自らの胸のふくよかさを初めて知らされた。

陽を浴びることの知らなかった肌は病的なまでに真っ白で、故郷の冬山を覆う雪のようだ。

戸惑いをなんとか押し殺し、黙して立つ彩華を、鈴風はその場に座らせると髪を結い始めた。

座れば毛先が床に広がる程の茶色を高い位置で結い、ドレスと同系の紗を巻いて一本の長いうねりを背中に垂らす。

更にどこか嬉々とした様子の鈴風は、彩華の細い首から浮き立つ鎖骨にかかるように、きらびやかな細工の施された金の首飾りを巻いた。

最後に何やら大きな箱を開き思案気に眺めていたが、結局その中からはあまり派手派手しくない紅を取り出して、彩華の唇に乗せただけだった。

「……おきれいです」

自らの作品に満足するように、鈴風が讃辞を口にする。

だが、どんなに着飾ったところで、鏡の中のこの女がどんなに薄汚い者であるのか、彩華自身が誰よりも知っている。

手をかけてくれた者に言うべきことではないと承知しつつも、笑みの一つ返すことなく、彩華は小さく頷くことしかできなかった。できるなら、今すぐ全てを脱ぎ去って、ここから逃げたかった。今なら、間に合うかもしれない、と。

きらびやかな世界とは無縁であろうとも、堂々と胸を張って生きていけるのかもしれないと。

だが、それを許さぬとばかりに、背後から声がかかった。

「これはこれは……想像以上だな」

普通は前触れがあってから、王は後宮を訪れるものらしい。

後宮のしきたりなど知ったことではないが、鈴風がそう言っていた。

だが、この月の室には王はいつも突如として現れる。

多忙な執務の合間に足繁く。

僅かな時間でさえを、惜しむように。

それを人々は、暗黒王のただならぬ想い故と、取るらしい。

「滑稽なだけです」

彩華は鏡越しの王にそう答えた。

王は座ったままの彩華の背後に片膝をついた。

そして、おもむろにまとめてある髪を手取る。

ビクリと身じろぐことは止められない。

それでも、声を出すことは押しとどめた。

「お前は……お前の美しさを知らぬのか？」

王が、紗に纏まりながら、背に流れていた髪を口元に運ぶ。

指先で弄びながら、口づけるのが鏡に映った。

いとも簡単に王の指に絡まり、好きなように扱われる。

それが、必死に虚勢を張っている彩華の、本当の姿なのかもしれない。

「……美しい……私が？」

東方の辺境にあって、彩華の容姿は確かに美しい部類に入った。故にここにいる。

だが、この後宮に一步足を踏み入れた瞬間に、己の容姿がいかほどでもないことに、彩華はすぐさま気がついた。

まして、あの方に比べれば。

いいえ、比べることさえおこがましい。

「そうだ。お前がその気になれば……国の一つや二つ、血を見ることなく容易く手に入ろうな」

王は言う。

これは、本当だろうか。

そんな筈はない。

これも嘘。これも演技。

だって、そこには鈴風がいる。

「そんなものいりません」

ならば、彩華も演じるだけだ。

僅かな本音をそこに乗せながら。

「……そうだったな」

彩華は髪を王から取り戻すように身を離した。

王は髪をあっさりと手離す。

「何もいらぬのだったな」

王から離れ、立ち上がるとうとした彩華の腕は、武骨な手のひらに掴まれて動きを阻まれる。

「だが、俺はお前が欲しい」

まるでそれが本当の思いのような強い力で腕を引かれ、王の胸元に乱暴に招き入れられる。

背後から腰に腕が回り、闇の帝王に彩華はいとも簡単に捕らわれた。

目の前には、鏡。

着飾った女が、強靱な男に抱きとられる様が映るのを、彩華は他人事のように見ていた。

「出ていけ」

王の低い声が、身体に響いて震えるほど間近で聞こえる。

それは、部屋の隅に控えていた鈴風に向けられた言葉だった。

鏡の中に、頭を垂れ膝をつく鈴風の姿がある。

彼女は深々と頭を下げてから立ち上がると、どこか誇らしげにも見える様子で部屋を出ていった。

鈴風が出て行ったのを見届け、彩華は王の腕から抜け出ようと身じろいだ。

しかし、王は彩華を抱く力を緩めようとはしない。

「陛下？」

観客のない茶番は必要ない筈だ。

彩華は戸惑いながらも幾らかもがいて、王に抗議する。

「何か、香でも燻らせているのか？」

問いの意味が分からず首を傾げる。

「甘い香りがする」

そんな言葉と共に、耳の後ろあたりに鼻先を押し付けられた。吸い込む呼吸が耳に直接触れて、彩華は身を竦める。

「悪くない香りだ」

何の香りだろうか。

彩華は、何も付けていない。

鈴風が、ドレスに香でも焚きしめたのだろうか。

項に何かが押し付けられる。

それが王の唇だと鏡に映る姿で知った。

王が何の表情も浮かべぬままに、誰にも触れさせたことのない、目にした者でさえ数える程の首筋、肩へと唇を滑らせていく。

「……お離し下さい」

声が震えていないことに安堵する。

だが、王は彩華を抱いたまま、更に唇を這わせていく。

やがて、それはあの場所に辿り着いた。

あの日、王が契約の印の如く、刻んだ剣の軌跡。

もう既に跡かたもなく消えているそれが、まるでそこにあるかのように。

そこに舌を這わせる王の姿に、再度、契約の内容を突き付けられた。

「何を？」

腕を掴んでいた手のひらが離れたと思うと、それは胸の膨らみを布地の上からぐっと握った。

大きく開いた襟ぐりは、ほんの少し王の指先が望めば、直接肌を差し出すだろう。

「美しい女を前に、男がすることはさほど多くない」

王は言いながら、腰を抱く腕に力を込めて、彩華の身を更に引き付ける。

王の真意を掴みきれないながら、彩華はもがくのを止めた。

「美しくなど……ありません」

大人しくなった彩華の晒された肩に、王は再度口づけた。

「私は醜い。欲しいものを手に入れるために、なお醜くなるばかりです」

王が肩に唇を押し付けたままで、視線を上げる。

鏡越しに目があう。

「……醜さと美しさは紙一重だ」

そうだろうか。

そうかもしれない。
なぜならば。

「恐怖と畏敬が紙一重のように？」

この王はその表裏で存在しているから。

一瞬ではあったが王の唇が面白気に歪んだ。

触れる感覚でそうと感じただけだから、気のせいかもしれない。

胸元に置かれた手のひらが、彩華の知らぬ動きで柔らかなその形を崩す。

痛みはない。

何か不穏な気配が身体のそこかしこで蠢き始めた気がしたが、それをすぐさま否定する。

何もない。ある筈がない。

王に触れられても、何も起こり得ない、と言い聞かせる。

「お離し下さい」

不埒な片手が、腰を撫で、脚を辿る。

際限のないように思われる戯れに、彩華は王の手首に指を触れて、終わりを請うた。

「そう言うな」

闇帝が囁きながら、唇で彩華の背を辿る。

「……東方の女の肌の滑らかさは、素晴らしいな」

それは、王の心からの言葉に思えた。

ゾクリ、と背筋に悪寒が走る。

それとも？

ふるりと震える身体に、闇帝の小さな笑いが聞こえた。

「寝台に行け」

経験はなくとも、命令の意味が分からぬほどには無垢ではない。

「なぜでしょう？」

だから、この疑問は何故そのようなことをしなくてはいけないのかというものだ。

寵はいらぬと、形だけの正妃で良いと。

契約はそうではなかったか。

「愚問だな」

言うなり、王はその場に彩華を押し倒した。

押し掛かってくる男を身体で拒むでもなく、彩華は言葉のみでそれを拒否する。

「伽のお相手をお求めならば……他の方をお召し下さい」

この身は惜しくない。

欲しいものを手に入れる道具に過ぎない。

だが、道具ならば道具らしく扱わねばならないのだ。

彩華はぎりぎりのところで、己に言い聞かせている。

どんな綻びも許されないほどに、張りつめて。

「他へ行けという女は、お前で二人目だ」

一人目が誰かを問いはしない。

ただ、彩華は王に組敷かれたままで、もう一度言う。

「お離し下さい」

王が彩華から退くことはなかった。

だが、先に進む気配もない。

「一人目の女は、他に想う男があったのだったな」

見下ろしてくる王のそれは問いかけではない。

彩華は黙って、王を見つめ返した。

彩華の身につけているドレスより、よほど美しい碧眼には、何の

感情も読み取れない。

「お前はなぜ俺を拒む？」

「必要ないことだからです」

この身は道具。

欲しいものを手に入れるための。

王に抱かれることが、欲しいものを手に入れる手段であったならば、いくらでも応えただろう。

後宮に上がったからには、それはもっとも正当な手段だった筈だった。

しかし、美しい者が居並ぶ中、それは不可能だと判断した。

だから、王の謀に乗ったのだ。

であれば、これは必要ない。

必要のないことはしてはいけない。

それがどんな綻びになり、どんな亀裂を生むか分からないから。

「私は形ばかりの正妃の座が欲しい。貴方様はあの方を手に入れた
い……私と貴方様の間に、このような行為が必要でしょうか」

闇帝の表情は、やはり変わらない。

ただ、彩華を見下ろしている。

彩華は、そっと王の胸を押した。

行為の拒否。

王は、彩華の手に僅かに揺らぐこともなく、伸し掛かったまま。

「お前は俺が女一人への執着心でこの茶番を始めたと思っているのか？」

やがて、そう尋ねてきた。

「さあ……存じません」

それは、彩華には関係ない。

王のこの謀が、あの方への執着心から始まったことであろうと、
他に何らかの思惑があらうと。

「興味もございません」

彩華には、どうでもよい。

どうでもよいことでなければならぬ。

「私は、私の欲しいものが手に入れば良い」

王は彩華を離さない。

ただ、その無表情で見下ろしてくる。

彩華は、それを見返す。

光の方から目を逸らしても、この王からは逸らさない。

この王から、視線を逸らす理由はない。

王はやがて静かに身を起こした。

軽くなった身体を起こそうとした、その時、閉じられた扉の向こ

う側から声がした。

「陛下、失礼致します」

男の声。

知っている声だ。

「珪心様、少しお待ち下さいませ」

鈴風が男を押し留めているようだ。

珪心。

王の腹心。

そして、契約に名を上げられている男。

「後にしろ」

王は彩華の腕を引いて、身を起こさせた。

だが、それは決して親切心などではない。

「申し訳ございません、陛下」

再び、珪心という男の音がする。

「火急の御相談です」

王は欲望の一片も感じさせない動作で彩華を引き寄せると、無造作に背中に並ぶドレスのボタンを幾つか外した。

頼りない生地は、すぐにも彩華の肌を男の目の前に露わにする。

「陛下！」

どうやら、珪心は本当に急いているようだ。

声に切羽詰まったものが混じる。

だが、応えぬ王は彩華の現れた肌に、鷹揚に唇を寄せた。

王の意図を彩華は多分間違いないと読み取った。

初めて自ら手を伸ばし、王の首に腕を絡める。

謀が進んでいく。

後戻りはできないのだ。

「珪心様！」

うろたえ、叫ぶ鈴風の音がする。

彩華は目を閉じて、ただ、王の背を抱く腕に力を込める。
身体が逃げてしまわないように。

「陛下！ 失礼致します！」

彩華の背後で、扉が開けられる音がした。

「珪心。無粋なことをするな」

彩華を抱き、晒されているのであろう背を撫で、胸元に顔を埋めたままで王が呟く。

その声は相変わらず何の感情も見えない。

「申し訳ありません。ですが……」

彩華は王の背に回していた腕から力を抜いた。

王から少しばかり身を離して、ちらりと珪心と呼ばれる男を見やれば、会うのが2度目の男は驚いたように見開いた瞳で彩華を見つめ、はっすると慌ててその場に膝をつき頭を垂れた。

「月の方様にも、申し訳ございません」

彩華は何も応えず、王に視線を向ける。

王は彩華の視線を受けて、まるで抑えきれぬとも言うように、もう一度首筋に唇を触れた。

「陛下！」

珪心が動揺を隠しもせずに、声を上げる。

王は、肩を竦めた。

「本当に火急の用なのだろうか？」

そう口にしたが、いつの間にか腰まで滑り落ちていた彩華のドレスを引きあげて肩にかけた。

そうして、ようやく彩華を離して立ち上がる。

彩華は力なくそこに座り込んだまま、王を見上げた。

「また、手に入れ損ねたな」

頬を手のひらが撫で、そして、離れていく。

「貴方様の気まぐれが少々長く続くだけのことです。ごさいますよう」
彩華の答えに僅かに唇の端を上げ、王は珪心を伴って部屋を出て行った。

王と入れ替わりに、鈴風が戻ってくる。

「月の方様！」

驚いた様子で駆け寄ってくる顔は、笑みこそ浮かんでいないものの、紅潮しその高揚を伝えてくる。

仕える主が、王の寵を受けるか否かは、侍女の処遇にも大きく関わる。

それ故、この女性は彩華に手をかけて着飾らせるのだろう。

「月の方様？」

彩華は身動きできなかった。

ドレスが乱れて、肌を晒していることも。

髪は崩れて、無残になっていることも。

分かっていながら、何もできずに座り込んだまま。

「大丈夫ですか？」

鈴風の声音が変わる。

彩華を覗き込んでくるそこに、先ほどまでの浮き足立ったものはない。

心なしか青ざめ、声にも真摯な響きがあった。

己はそんなに哀れな様子なのだろうか。

彩華は鏡に目を向けようとして、しかし、それを止めた。

どんな姿をしていたとしても。

先ほどの着飾った姿より、よほどそれは彩華に相応しい筈だ。

ただ、この侍女が手をかけたものが、暴君によって碎かれたことだけは分かり、彼女がそれを喜んでるばかりではないだろうと知れるから。

「せっかくきれいにしてくれたのに、ごめんなさい」

つい、そう口にした。

鈴風は驚いたように目を見張り、そして、首を振るう。

「すぐに……直しますから、お気になさいませんかよう」

直してくれなくて良い。

本当は、これこそが彩華の姿。

みすぼらしく、弱々しく。

だが、鈴風が手を伸ばしてくるのを拒む気力は、もう彩華には残っていないかった。

5 庭の片隅で

華やかさに埋め尽くされたように見えた後宮の片隅に、薬草ばかりが植えられている花壇がひっそりとあることに気がついたのは、ここへ上がって数日が経った頃だ。

平穏だった日々がもうくも崩れ去り、たった一つの望みを叶えるためだけに、己の行方を探り、その末に辿りついたのがこの『名無しの国』の後宮だった。

戸惑いと不安と焦燥と重圧。

希望など一欠片もなく、そんなものだけを抱えてここへと上がったものの、成すべきことの糸口さえ見つけることができずに途方に暮れるばかりだった。

美しいと称えられた容貌は、ここでは凡庸だ。

手元にある幾つかの薬は、使う機会さえ手に入れることができそうにない。

明るい兆しなど、何もなかった。

己の不甲斐なさに、憤りと嘆きだけが募っていく日々。こうしているうちにも彩雪は。

あの男は、きちんと約束を守ってくれるだろうか。

ああ、そのためには私こそが、約束を果たさねばならない。そう、思うといっても立ってもいられなかった。

そんな時に、そこを見つけた。

なんとか気を鎮め、活路を見出そうと……だが、どんな活路ももはや見つけることはできないだろうという予感を抱え、夜の後宮の庭を夢遊病者のようにフラフラと歩いていた。

彩華が生まれ育った地方にはない夜の熱気に眩暈を覚えて立ち止まったその時だ。

覚えのある香りが漂ってきた。

少し、鼻をつくような、目にしみるような。

普通ならば、敬遠しがちな独特なもの。

だが、彩華にとっては懐かしさこそを感じさせるそれに誘われるままに歩いた先にあったのが、誰も目を止めぬような後宮の裏庭の片隅にある小さな花壇だった。

いや、花壇と呼んで良いのか。

小さな石ころで囲ってはあるものの、誰かが世話をしている訳ではないようだ。

しかし、様々な草に埋もれそうになりながらも、確かに見覚えのある幾つもの葉草が生えていた。

その中の一つが、花開き、強い匂いを放っているのだ。

彩華は、空を見上げた。

やはり、満月。

この花は、満月の晩にだけ花を開く。

手を伸ばし、花を手折った。

途端に鼻を覆いたくなるようなきつい香りが消える。

そして、辺りに満ちるのは、心を穏やかにしてくれる優しい淡い香り。

この花は、咲いた時に手折ってこそ意味のある花なのに。

後宮の片隅で、その存在さえも知られずに、ただひっそりと咲いていたのだ。

手折られるその瞬間を、どれほど待ち続けていたのだろうか。

彩華は花を持って、部屋へと戻った。

鎮静効果があると教えられた香りに誘われるように、その夜は後宮に召し上げられて以来、初めて深い眠りにつくことができたのだ。

それから、何度かそこを訪れた。

後宮の片隅の、懐かしい草花が待つ花壇。

それは、彩華にとってほんの小さな、だが、確かな救いだったのに。

だから、そこに人影を見つけた時は、ここも静かな場所ではなかったと、抑えきれない落胆にため息を零しながらも。

寄り添うようにして立っている二人。

男女だと知れるそれが、この場所に何を求めているかは明らか。この場は譲り、早々に離れようとした。

「誰だ!？」

だが、気がついたらしい男に詰問の声をかけられた。逃げることはない。

彩華には何も後ろ暗いところはない。

だから、足を止めて、振り返った。

「……月の方様」

彩華の通り名を口にしたのは、詰問と同じ声だった。

彩華は、声の主を見た。

若い男だった。

どこかで見た気もする

しかし、名はおろか、どこで見たのかすらも思い出せなかった。

「月の方？」

通り名を傍らにいた女性が繰り返す。

頭から腰までをすっぽりとヴェールで覆い隠し、姿形は分からない。

僅かに零れ落ちる髪が、見事なプラチナブロンドであることだけが見て取れた。

「一月ほど前に、召し上げられた方です」

男が彩華の素姓を語る。

どうやら、彩華のことは相手に完全に知られているようだ。

彩華は男女の姿を敢えて見ないように目を逸らし、黙って立っていた。

相手がどのような身分の者かは知れない。

ただ、新参者の彩華にしてみれば、無用な波風を立てぬに越したことはない。

だが、二人の男女もまた、黙したまま彩華の対峙するだけ。

彩華は、それを立ち去ることを望まれているのだと判断した。

「失礼してもよろしいでしょうか」

尋ね、返事がないことを了承と受け取って歩き出そうとした瞬間。風が吹いた。

彩華の背後から、二人に向かって。

そよ風ではない。

暑い夜に、なお熱を運ぶ、これもこの地特有の突風。

彩華の目の前で、女性のヴェールが風に舞う。

「……っあ！」

女性は慌てて、彩華から顔を背けた。

男が女性を背後に庇う。

しかし、不本意ながら……そう、不本意だ……彩華の視界には、はつきりと女性の貌が浮かびあがった。

知らぬ女性だ。

だが、零れ見えた通りの輝く白銀の髪。

瞳は、月の滴が零れ落ちたか如くの淡い金。

まるで磨き上げられた大理石のような肌は、夜の闇に光を放って、その姿は浮かんでさえ見えた。

一目で忘れられぬ存在となる得ることが、当たり前のような女神がそこにいた。

風が止む。

彩華。

男。

そして、女神。

誰もが口を閉ざす中、彩華は踵を返した。

この男が誰か。

この女が何者か。

興味がない。

知れたところで、彩華の望みが叶えられるとは思わなかったから。

「待って！」

だが、女性が彩華を止めた。

男の脇をすり抜けて、彩華へと駆け寄るときぎゅっと腕を握った。

「ここで見たことは、誰にも言わないで」

間近で見ればなおも美しい面に、切実な感情を滲ませて女性は緘った。

彩華は彼女を見つめ、そして、背後で黙ったまま彩華を見ている男を見遣った。

「……ご安心を」

彩華は女性の瞳を捉え、一瞬として逸らさずに、そう口にした。

「私には話す相手もございませんし」

女性の腕を外し、もう一度背後でじっと彩華を見つめている男に視線を置く。

思い出した。

名は知らない。

だが、彩華が後宮に入り、闇帝に謁見した折りに、その傍らに控えていた男だ。

しかし、それもまた彩華には興味のないことだった。

「話す気力ありません」

ここでは、彩華は独りだ。

たわいのない、とりとめのない話をする相手はない。

そして、何よりも、何かを語る気力など、今の彩華にはない。

「……失礼致します」

彩華は一礼を女性に捧げ、男性にも会釈をするとその場を後にした。

それだけ。

その夜はそれで終わる筈だったのに。

裏庭で見た美しい女性が、この後宮において最も王の寵愛を受けている「光の方」だと知ったのは、その2、3日後のことだ。

その女性が、男性と会っていた。

それも、王の腹心の一人と。

誰も近付かぬ裏庭の片隅で。

闇にほど近い新月の夜に。

人目を忍んでいるのは明らか。

それは後宮で競い合い落とし合う女性達の誰かに知れば、瞬く間に広まり王の耳にも入るだろう。

だから、何だと言うのだ。

彩華にとって、それはどうでも良いことだった。

欲しいのは、無意味な諍いの種ではない。

彩華は口を閉ざし、ただただ、叶える術のない望みを胸に抱いていた。

そのままであれば良かったのに。

否、そのままでは、望みは叶えられなかった。

だが、こんな形で望みを叶えるのか。

こんな形でなければ、どう望みは叶えられるというのか。

どうすれば良かったのか。

どうすれば良いのか。

まだ、答えは分からない。

まだ、答えは出ていない。

もはや、どんな花の香りさえ、彩華は眠れない。

6 真夜中の来訪

それは小さな、本当に小さな物音だった。

以前の彩華ならば、気にも留めなかっただろう。

誰かが共に暮らしていれば当たり前前に聞こえてくる程のものでもあり、風が窓を揺らせば奏でられる音にも似たような些細なもの。

そして、それが真夜中であれば、眠りの中に消えて、存在にさえ気がつかなかったであろう音だ。

しかし、ここで過ごす彩華は、どんな物音にも過敏に反応する。

ここは、名無しの後宮。

彩華にとって、安らぐ一瞬とない場所だから。

彩華は寝台の上で身を起こし、音のした方へと目を向けた。

バルコニーに続く扉がそっと開かれるのを見て取って、眉を寄せつつ床に足を降ろす。

既に、時は夜半を過ぎているだろう。

鈴風は彩華が寝台に入ると共に去ったし、まさか光の方がこんな夜中に訪れるとも思えない。

扉は人が一人ようやく通れるかという程度に開かれて、動きを止めた。

「どなたか、いらっしゃるのですか？」

彩華の呼び掛けに、扉が今少しと開かれた。

そして、大きな影がスルリと内へ入り込んでくる。

「……陛下」

予想外の人物ではあった。

しかし、ここを訪れる可能性のある数少ない者として名を上げることは難しくはない。

だから、彩華はあまり驚きはしなかった。

寝台を降りて恭しく一礼をして顔を上げる。

王は、開いた扉を閉めることなく立ったまま、動かない。

「何か御用がございましたか？」

王へと歩み寄りながら、夜に相応しい静かな声で尋ねれば、帝王は闇夜を支配する声音で答える。

「少し寄っただけだ」

妙なことを言うものだ、と思った。

闇帝が、彩華の元に通うならば、人目がなければ意味がなからうに。

だが、王の考えが、彩華に読める筈もない。

少し寄っただけだと言うならば、何かを王が望むまで放っておけば良いのだろう。

そう結論を出し、闇帝に背を向けかけた彩華の鼻先を、開いたままの扉から入り込む風と共に、不穏な匂いが漂った。

ほんの少し前までは嗅ぎ慣れた、しかし、ここしばらくは縁遠かったそれ。

彩華は足を止め、王をもう一度視界に納めた。

いつもと変わらぬ、闇を纏う美しい男がそこに立つ。

「……血？」

闇帝は無表情のまま、彩華の呟きが聞こえなかったかのように、部屋の奥へと足を進めた。

荒々しい動作で、先ほどまで彩華が横たわっていた寝台に腰掛ける。

彩華は、開けられたままだった扉を閉めて、一呼吸してから王へと振り返った。

注意深く王を見つめる。

今が夜中であることを少しも感じさせない、隙のない鋭い雰囲気は常と何も変わらない。

この王は、光のない漆黒の世界こそが棲家であるように。

だが、太陽のもとでも堂々とその身を晒す。

この方は、眠ることがあるのだろうか。

彩華はそんな風に思い、人である以上それは必要不可欠なことがあるのだと、馬鹿げた問いを振り払い王に近付いた。

闇帝が身につけているのは、寝着ではなかった。

王たる者が身につけるに相応しいのであろう極上の生地で作られていて、しかしながら、派手な装飾は一切省かれて、今すぐにも一兵士として戦地へ赴くことができそうな衣だった。

黒を基調したそれに血らしきものは見当たらない。

だが、歩み寄れば、その匂いは生々しく更に深まる。

「どこか……お怪我を？」

尋ねれば、王は表情のないままに、淡々と答えた。

「俺はかすり傷だ。明日になれば、霧の室の骸に騒がしくなるだろうがな」

その言葉だけでは、何があったのかは分からない。

ただ、彩華は王が傷を負っていることは確かであると知り、踵を返すと調度品の一つに近付いた。

「騒がしいのは嫌いだったな」

背後で尋ねてくる王に、頷いてそれを認めながら、引出しの中から箱を取り出した。

蓋を開けると、幾つもの包みが整然と治まっている。

その内のひと際小さな一つが目止まる。

今ならば、これを使えるかもしれない。

だが、もはや、これを使う相手はこの方ではない。

彩華は、それから目を逸らし、違う包みを手にして王を振り返った。

王は、じっと彩華を見ている。

彩華はそれを見返しながら、王に近付いた。

あれを使っていたならば、この王はどんな瞳で彩華を見ただろうか。

そして、彩華はそれをどんな思いで見つめ返したか。
いや、その時、彩華は王の瞳を、見つめ返すことができただろう
か。

「霧の室はここから遠い。ここで大人しくしている」

笑いを含んでいるようにも聞こえる王の言葉には頷かず、彩華は
男の前に膝をついた。

「お怪我はどちらですか？」

包みを開きながら、尋ねる。

中からは薬草を乾燥させ粉末したものが出てくる。

色合いと香りに問題がないことを確認して、見上げると王がまた
じっと彩華を見ていた。

何故、こんな風に見るのだろう。

何か、己には不審なところでもあるのだろうか。

「薬草か？」

王は彩華の手元に視線を移した。

表情からは何も読み取れない。

「はい」

答えて、気がつく。

「……毒と、お疑いですか？」

そういうことだろう。

確かに、王たる身では、差し出される全てのものを疑ってしかる
べきなのだろう。

しかも、この方は闇帝。

そして、彩華をこの国に送り込んだのは、未だに帝国への完全な
隷属を拒む東方の小国だ。

「いや、薬でも毒でも構わん」

だが、王はそう言って、奇妙な笑みを浮かべた。

「この身にはきかぬ」

彩華は、答える王を見上げた。

王は笑みを消して、彩華を見下ろす。

「薬も毒もきかぬ……それは、俺にとってただの草だ。そういう身体なのだ」

その言葉の意味を理解して、彩華は包みを元に戻した。

ごく稀に、そういう人達がいることを、彩華は経験で知っている。痛み止めが効かずに、もがきながら助けを求められたことを思い出す。

闇王もそんな状況に陥ったことがあるだろうか。

ふと、思ったが尋ねる筈もない。

「承知致しました。ですが、すぐに立ち去って下さらぬおつもりならば、血を拭って下さいませ」

部屋に立ちこめるすえた匂い。

慣れてはいても、好きな筈がない。

この匂いは、誰かが傷ついている証。

誰かの命が少しずつ失われているという証に他ならない。

「血の匂いも嫌いです」

闇帝は黙って腕を差し出した。

それは闇帝がここに留まるつもりであることを示していたが、彩華は言及はしなかった。

差し出された腕のその袖を捲り、思わず眉を寄せた。

かすり傷、とは言いながら、そこは今だ生々しく血潮を溢れさせている。

「これを……貴方様はかすり傷とおっしゃるのですね」

立ち上がり薬箱を片付けて、真新しい布地を持ち出す。

闇帝の元に戻り、流れる血を拭き取る。

腕の上の方をギュッと縛って止血の処置を施し、傷を覆うように布地を正しい二の腕に巻きつけた。

「手慣れたものだな」

彩華の心臓が一瞬小さく跳ねた。

この後宮に集うような姫君達は、こんな傷を負った者など見たこ

ともないのだろうか。

王宮の奥深くで大事に大事に育てられ、かしずかれる者は、その国を護るために、どれほどの者が血を流し、命を落とすかを、言葉で知ることであっても、その目に映すことはないのか。

「……応急処置ですから。きちんとした御方に、早々に見て頂いて下さい」

彩華は、何も答えず、そうとだけ告げた。

闇帝もそれ以上、何かを尋ねる風でもない。

「医者か。嫌いな連中だな」

珍しくも苦々しさ隠さない闇帝の言葉は、小さな子供のダダにも聞こえた。

彩華は、つい、小さな笑みを唇に浮かべた。

またも、じっと闇帝に見られていることに気がつき、慌てて表情を消す。

別に、笑うことを禁じられている訳でもないのに。

何故か、見られなくなかった。

「今夜はここで休む」

言うなり、闇帝はごろりと彩華の寝台に横たわった。

この後宮に入った折りに受けた説明によれば、女達は王の寝所に召されてお相手をするものらしい。

だが、後に鈴風が話したことによれば、王が自身の寝所に召す女性はいかの光の方のみ。

それ以外の女性を召したことはないのだという。

ただ、時折、後宮のどこぞの室で、夜を過ごすことはあるらしい。しかし、朝になって室を出る王を見た者は誰もいない。夜のうちに現れて、夜のうちに去るのだ。

あまりに後宮事情に興味を持たぬ彩華に、鈴風が諭すように教えてくれたそれらが頭を過ぎった。

「どうぞ」

ならば、今夜も王はここで少しばかり休み、夜が明けぬうちに去

るのだろう。

それとも、朝まで過ごし……月の方への執着ぶりを他に見せつけるのか。

どちらでも構わない。

闇帝の思惑どおりに進めれば良い。

彩華は、立ち上がった。

「どこへ行く？」

寝台を離れる彩華の背に、意外にも王の声がかかる。

足を止めて振り返れば、王は肘をつき、その手に頬を乗せて、彩華を見ていた。

本当に、どうして、こうも見るのだろう。

「寝台はお使い下さいませ……私はどこでも眠れます」
いや、どうせ眠れないのだから。

どこにいても同じだ。

「お前は何も聞かぬのだな」

聞かぬのは、怪我の理由。

それから、霧の室の骸。

そのどちらも。

「……興味ございません」

彩華は答えた。

本心だ。

興味はない。

知る必要などない。

「そうか」

王は何故か、唇に笑みを浮かべた。

そして、肘を崩し、寝台に顔を埋める。

「この寝台はお前の香りがする」

その言葉に何故か、頬が熱くなる。

当たり前のことだ。

そこは彩華の寝台であり、先ほどまでそこで横たわっていたのだ

から。

「……甘い……香りだ」

目を伏せて息を吸い込む王から目を逸らし

「それは……月待草の香りでしょう」

事務的にそう答えた。

「月待草？」

「はい。鎮静効果があります。強くはありませんが鎮痛の効果も」

羞恥を誤魔化すように香りの効用を説明しながら、この王にはそれも効かぬのだと、思い出した。

無意味な説明をしてしまったと、羞恥に少しばかりばつの悪い思いを加える彩華の前で、しかし、意外にも王は頷き更に息を吸い込む。

「薬は効かぬ筈なのだがな」

闇帝が瞳を伏せた。

「……よく、眠れそうだ」

それが本音であるように、王の表情に僅かであっても穏やかさが浮かぶ。

彩華は王の前から立ち去ろうと、一步を踏み出しかけて迷う。

こんな時に言う言葉。

「……お休みなさいませ」

結局、久しぶりにそれを口にする。

以前ならば……同じ言葉を返してくる存在の額に唇を触れたものだが、もちろんこの王相手にそんなことをする筈もない。

「ああ」

彩華の言葉に王は特別な反応もなく、そう答えただけだった。伏せられた瞼が開くこともなく。

彩華は王に背を向けた。

一時間程後に、彩華はそっと王の眠る寝台に近付いた。

静かな表情に苦しげなものはなく、胸は穏やかに上下している。

彩華の寝台で無防備に眠りに就く男を、不思議に思いながら、寝台の脇に座った。

かすり傷と王は言うが、彩華が知る限りにおいて、それは発熱してもおかしくない深さの刀傷だ。

そんな時、例え、薬が効かぬ身であっても、身体を冷やせば幾らかの救いにはなるだろうから。

そう思って、王の側に控える。

闇帝の言う甘い香りが、彩華の周りにも流れてくる。

初めて見つけたあの夜から、満月には必ずそれを摘み取りに行く。だが、今となっては、その香りで眠ることはできなくなっていたのに。

目を伏せる。

甘い香りの中に、彩華のものではない男の香りと……血の香りが混じる。

嫌いな筈なのに。

なのに、ふわりと意識が遠のく。

彩華は、そのまま眠りに落ちた。

7 女と謎

少しばかり、眠ったようだ。

闇帝の名を持つ男は静かに目を覚まし、己が女の部屋で短い時間とは言え、深い眠りに落ちたことに、いくらかの驚きを持って身を起こした。

すぐに足元に目がいく。

女がいた。

闇帝が横たわって後、一時間ばかりして女は近づいてきた。

未だ浅い眠りにあった男はそれに気がつき、女が少しでも不穏な動きを見せれば、腰にある短剣で突くことを迷わず、横たわり続けたのだが。

女は、すぐに闇帝が眠る、本来は己のものである寝台の脇に座りこんだ。

何をしてるのかと、起きあがって尋ねるべきかと考えているうちに、穏やかな寝息が聞こえてきて。

気がつけば、自身も眠りについていたらしい。

女は今も、床に座り、寝台の縁に寄り掛かるようにして、眠っている。

その姿は、己に対峙した女とは思えぬ……まるで年端もいかぬ幼い少女のようにも見えた。

この女の美しさは、不思議だ。

容貌は美しいとは言えようが、誰もを魅了するまでの美貌を湛えている訳ではない。

身体は女性らしいまろやかさと艶やかさを備えてはいたが、それも他を圧倒するほどではない。

こうして見ると、この女は何もない。

少しばかり端正な、しかし、凡庸な女だ。

だからこそ、気がついた。

己を見据える瞳の強かさ。
伸びた背筋に誇り。

そして、何かを求め、何かに挑む者の真摯さ。
それが、美しい、のだと。

まやかしの筈の甘い言葉に、時折、本気が混じることを、男は否定しない。

結んだ契約を思えば、手折るべきではないと分かっているながらも、ひどく欲しい時がある。

契約と言えば……この女の望むものもまた奇妙だった。

正妃の座が欲しいという。

それは、この後宮に召し上げられた女ならば、誰もが欲しいものだろう。

だが、寵は頑なに拒む。

国の命により、後宮に上がったのだろうか、ならば、最終的に望まれるのは、次の王たる者を産むことだろうに。

何が本当に欲しいものなのか。

知れない。

謎の多い、不思議な女。

そして、それがまた、美しさを際立てていることを、男は知っている。

闇帝の眺める先で、女の長いまつげが揺れて、瞼が上がる。

目覚めて、すぐにも覚醒した瞳が闇帝を見た。

この女は己と同様に、まどろむということを知らぬらしい。

「痛くはありませんか？」

まず、そう聞かれたのは意外だった。

「大丈夫だ」

答えると、無表情にも隠しきれぬ安堵を覗かせて頷いた。

闇帝の傷を、心から案じていたことが分かる様子に、また、一つ。女の謎が増える。

傷の痛みを知る者。

血の滴りに眉を寄せても、怯えはしなかった。

手当の手際の良さは、おぎなりに教えられたものではなく、幾度とそれを繰り返してきた者のそれ。

寝台の横で夜を明かしたのも、この傷を思っただろう。

無数の傷に慣れた身には今更だが、熱にうなされることもあり得る深さの傷。

この女は、それも知っているのか。

何者か。

出自は簡単に知ることができる。

だが、知りたいことはそんなことではない。

ならば、己はこの女の何が知りたいのか。

女は闇帝から視線を外し、バルコニーを見遣った。

そこは明るく、朝の到来を告げている。

まもなく。

闇帝の昨夜の所業が明るみになる。

騒ぎが始まるだろう。

女が立ち上がりかけた。

しかし、動きが止まる。

男が少し前から感じ取っていた気配に気がついたのか。

そういえば、昨夜、闇帝に気がつくのも早かった。

意識して気配を消してはいなかったが、この身は無意識にも足音を殺すのに。

「……来い」

女の腕を取り、寝台に誘う。いざな

聡い女は一瞬は怪訝に眉を寄せたが、すぐに闇帝の意図を察して身を寝台へと横たえた。

女の横に自らも横たわり、己とは明らかに造りの違う身体を抱き

込む。

女という生き物の柔らかさは、もちろん知らぬものではない。

寵愛はいらぬ、という女のものであってもそれはやはりたおやかに、闇帝の腕にしつとりと馴染んだ。

昨晚、男を眠りに誘った香りが、なお色濃く肌から漂う。

今女から立ち上り、鼻孔をくすぐるそれは、眠りとは真逆に位置しようかという、男の欲望を煽った。

女は少し身を強張らせながらも、闇帝の腕に大人しく抱かれていく。

情事を仄めかすように女の寝着を幾らか乱し……現れた肌がどれほどに滑らかなものであったのかを思い出して、つい唇を寄せた。

女の身体が腕の中で震える。

しかし、抗うでもなく大人しくしている。

首筋に触れた唇を浮き立つ鎖骨、そして、肩へと滑らせて。

知らず、女の身体を己の下へと引き込み、伸し掛かり。

女の腕が動き、闇帝の行為に不審を抱いたかのように、小さな手のひらが肩を押した。

微かな反意は、気に止まる程のものでなく、闇帝は手のひらをも女の肌に触れ。

「陛下？」

小さな声が、困惑を含んで発せられたその時。

扉を叩く音が二度響いた。

「月の方様、おはようございます」

返事を待たずして、開けられたそこから侍女が現れる。

「……っあ」

侍女は、己の主に重なる闇帝の姿に気がつくなり、さあっと青ざめた。

「申し訳ございません！」

慌ててひざまずき深く頭を下げる姿を見やり、すぐに抱く女に目を戻せば、常より仄かに色付いたように見える頬を強張らせながら、

じつと闇帝を見つめている。

闇帝に従うも、譲らぬものを湛えた瞳に見入りながら。

「月の方は……まだ、寝足りぬようだが」

控える侍女に告げる。

そして、それはまた闇帝自身のことであるとも言いたげに、寝台の上で身体を伸ばす。

女の瞳に、問い掛けが過ぎたが、それも僅かな間^まだった。

本当に、この女は察しが良い。

「あ、はい。では、今少し……」

そう言って身じろいだ侍女の背後、閉じられた扉の向こうで忙しい足音がし、おぎなりのノックさえもなく扉が開け放たれた。

「陛下！」

現れた腹心は、明らかな焦燥を浮かべながら、部屋へと踏み込んでくる。

「珪心……また、お前か」

肘をついて、その手のひらに顎を乗せた闇帝は、のんびりと無礼者を迎え入れる。

「私が参りました理由はお分かりでしょう!？」

珪心は、苛立ちを隠さぬ口調で闇帝に訴えながら、ずかずかと寝台へと近付いて行く。

「騒ぐな……月が起きる」

闇帝は言い、これ見よがしに女の髪の一房を手に取り、口づける。

珪心の歩みがピタリと止まる。

女は、闇帝の行動をじつと見つめていたが。

「陛下！」

珪心の声に、静かに答えた。

「もう……起きております」

女は猫のしなやかさで闇帝の胸元からすり抜けると、ほんの僅かに身を起こして、闖入者へと視線を向けた。

闇帝の乱した寝着が肩から滑り落ち、艶やかな肌が露わになる。

生真面目な珪心が顔を赤らめ目を逸らしたのは、その肌に淫らな痕跡を見つけたからか。

「月の方様……その、あの……御無礼を……」

己の不作法に今更気がついたというように、珪心が膝をつく。

「……謝罪はいりません。早く陛下をここからお連れ下さいませ」

その言葉に顔を上げた珪心ではあったが、女が乱れた寝着をざっと直して、寝台から降りようとすれば、眩暈を覚えたかのように慌てて顔を伏せる。

軍を統括する地位にある者らしい引き締まった身体が、強張り縮む。

面白い反応だ。

どうやら珪心は、この女に委縮しているらしい。

それは、この女に弱みを握られている、と考えているからか。

それとも、他に理由があるのか。

「つれないことを言う」

闇帝は寝台の上で身を起こしながら、女に手を伸ばし。

しかし、女はその手をすげなくかわして、珪心の脇を歩いて侍女へと近付いた。

啞然と成り行きを見ていた侍女が慌てて立ち上がり、女の身をシヨールで包み込む。

そのまま、侍女を連れて隣の部屋に向かうかと思われた女の足が止まる。

「……陛下……傷はきちんとお医者様に診て頂いて下さいませね」
僅かに振り返って告げられたそれに、勢い良く顔を上げたのは珪心だ。

「陛下！ お怪我を！？」

女の心中は良く分らない。

ただ、闇帝に向けた視線には、気遣うものが見えた気がした。
闇帝は軽く肩を竦めた。

「医者は嫌いだと言ったのを、聞いていたか？」

女は、小さく唇を綻ばした。

昨夜も一瞬だけ見せた……ぎこちないような笑み。
そして、また、すぐにそれも消えて。

「……失礼致します」

今度こそ、侍女を連れて部屋を出て行った。

衣服の乱れを整えながら歩く闇帝の後について歩きながら、珪心がお小言をくれる。

「陛下……ご寵愛が過ぎるのも考え物かと」

闇帝は少しの間を開けて、それを告げた。

「まだ、手に入れていない」

珪心が目を剥いた。

よほどに意外だったのだろう。

闇帝は笑みを浮かべる。

「血の匂いは嫌いだそうだ」

多分、自嘲に見えるそれ。

「だとすれば、あの女は永遠に手に入らん」

珪心はそれには何も言わなかった。

話題を変えるように、彼にとっての本題を口にする。

「……霧の室の件は」

昨晚、訪れた女の室。

大人しげな、物静かな女で何度か訪れたことのある女だった。

「情事の最中ならば、俺が殺せると思ったようだな」

閨で女に触れている最中に、刺客が踏み込んだ。

もちろん、室の主である女の手引きだろう。

「それほどの女でもあるまい」

剣は常に手を伸ばせば届く場所に置いてある。

それを手にして、現れた3人の男達を斬った。

寝台が真っ赤に染まり、先ほどまで闇帝に組み敷かれて嬌声を上

げていた女が、違う声を上げた。

耳障りなそれを消すように。

問答無用で女を突き刺した。

築かれた骸が、誰の所業であるかを示すために、女に突き刺した
剣はそのままにして部屋を立ち去った。

「……霧の方様のお国は深しんですが……」

珪心の言う国の名に興味はない。

「女の骸は、刺客と一緒に返してやれ……剣を立てたままだな」

骸を運ぶ馬車が深に到達するまでには、1週間程もかかるだろう。
その間に、王女であった者の身は腐り、虫が湧く。

そして、墓標のように立つ、闇帝の剣。

それを見て、かの国がどう動くか。

攻めてくるのか。

大人しく、頭を垂れるのか。

どちらでも良い。

いずれ、その国は闇帝にひざまずく。

「陛下」

珪心の声は、何かを気遣うかのように聞こえた。

「……俺は闇帝だ。恐怖で、世界を統べる」

闇帝は告げる。

「時が至れば、違う王が必要にもなるだろう。だが、今はまだ、必
要なのは、血塗れの王だ」

まだ、だ。

世界は無秩序に溢れ。

人が従うのは法ではない。

人は恐怖にひれ伏すことで。

世界はまやかしの平穏を保っているに過ぎない。

「違うか？」

やがて、時が来れば。

その時に、必要な王が現れれば。

誰が画策することもなく、闇帝は消え失せるだろうから。その時までには、闇帝は血に塗れ、暗黒を支配する。

「いいえ」

恭しく頭を垂れる者は、それを分かっている。

男が闇帝となる以前から、忠義を誓い傍らに在る者だ。

この者は己を裏切ることはない。

それを疑ってはいない。

だが。

罨を張る。

己の望むもの。

それを一つと取り零すことなく、手中に納めるために。

8 月夜の晩に

光の方に2度目に出会ったのは、やはりあの薬草の花壇でだった。後宮で迎える幾度目かの満月の夜。

月待草を摘みに、彩華は花壇を訪れた。

そこに並んでいるのは、ほとんどが治癒に使われる薬草ではあったが、その中にも一つ二つと不穏な色を見つけ、この花壇の持ち主が何者であるかは分からぬものの、決して博愛のみでこれを育てていた訳ではないと知れた。

それなりの知識のある者が手を施せば、この後宮の者達など根こそぎ亡き者にしてしまえる毒花を注意深く避けて、彩華は白い花を何本か手折る。

鼻を付く香りに、ふわりと心に染み込むそれが混じった。

「こんばんは」

不意に、背後から声をかけられる。

足音には、少し前に気が付いていた。

だが、あちらが知らぬふりで立ち去るならば、その方が良いと背を向けたままでいたのに。

「……こんばんは」

思いもかけず、明るい声で挨拶されてしまい、仕方なく彩華も振り返り応じた。

目にも眩しい女神が、すぐ近くに立っていた。

この方は、陽の元にあれば太陽の美神のごとく、夜に現れれば月の精のように。

いつも光輝き存在するのだ。

「少しいかしら」

己とはあまりに世界の違う美しい者に、跪きたいような、背を向けて逃げたいような思いを抱きながら、彩華はそれを表に出すことなく

「どうぞ」

静かな声で答えを返すことに、成功した。

光の方は僅かに迷う素振りもなく、彩華の隣にちょこんとしゃがみ込んだ。

小さな子供のような、あまりに無頓着な動作に少々面食らう。

後宮一の……否、後宮で唯一の闇帝の寵妃とは思えぬ、とても無邪気な行動だった。

「先日のこと、なのだけど」

しかし、そつと話す声は、秘密を語る大人の女性のもの。

彩華は、敢えて反応を示すことなく、もう1本の花を手折る。

「……誰にも言わないでくれてありがとう」

表には出さぬものの、内心驚いた。

何か、言い訳をするのかと思った。

まさか、礼を言われるとは。

彩華は立ち上がった。

光の方が一時として己の顔から目を逸らさない事を感じ取りながら、彩華自身は美しい方に目を向けることはなく、何時の間にも雲に姿を隠してしまった月を探す。

見つからない月を諦めて、だが、空を見上げたままで、じっと彩華を見つめて言葉を待っているかのような方に答えた。

「私がこの場に参りましたのは、この後宮で一番静かな場所に思えたからです」

静寂を破らぬように。

囁きに、ほんの少しだけ色を付けたような声で返した。

「騒がしいのは嫌いです」

だから、誰かに何かを話したりしない。

自ら、騒ぎ立てるようなことは間違ってもしない。

それを伝えただけだった。

「貴女もここへは望んで上がられたのではないのね」

しかし、ポツリ、と光の方が呟くのが聞こえた。

貴女も、にか。

望んだのではない、にか。

どちらに心が揺れたのか。

小さな動揺を与えた方に視線を向けそうになるのを堪えて、見つからないながらも、空にある筈の月を見つめ続けていたのに。

「……私、ここを出たい」

不意に零れた言葉に、思わず、しゃがみ込む方を見下ろした。

先ほどまで逸らされることのなかった瞳は、彩華と一瞬視線を交わしたと思うと俯いてしまった。

光を放つプラチナブロンズが目眩しい。

それは、まるで空の月がここに降りて来たかのようにだった。

「こんな所、嫌」

この方が、本当に月ならば、空に戻ることもできよう。

だが、そんな訳もないから。

「そんな言葉を口になさってはなりません」

彩華は戒めた。

なんて、無防備な方なのだろうか。

そのようなことを、無暗に口にして良い筈がない。

ここで生きている以上、闇帝の寵愛を受ける以上。

「闇帝は嫌いよ。私は珪心が好き」

光の方が顔を上げる。

一欠片の迷いもなく、彩華の視線を捕える鮮やかな碧。

それが揺らぎ、ポロリと宝石から滴が落ちる。

彩華は、そっとため息を零し、光の方の傍らに腰を降ろした。

彩華の持つ花は鎮静効果がある筈なのに。

今、ここに在る二人には、何と無力なのだろう。

「私は何者かも知れぬのに……そんなに簡単に心内を見せてはなりません」

静かに話しかけた。

袂から絹を取りだし濡れた頬を拭いてやると、なお、ポロポロと

涙が溢れる。

この方は初めて見た時、その美しさに目を見張った。
艶めかしく、華やかに。

暗黒王が愛でるに相応しい女人に思えた。

だが、こうして見ると、この方は思ったよりもずっと幼い。

彩華より幾つか年下だろう。

多分……あの子と同じくらい。

彩華のたった一つの宝。

だが、なんという違いだろう。

権力者の寵を受け。

他の男に想いを寄せ。

胸を痛め、涙する。

あの子は、そのどれ一つ、成すことはない。

できようもない。

それは、彩華に複雑な感情を抱かせた。

羨望。

嫉妬。

それから、憐憫。

彩華はふと気がついて、光の方を宥める手を止めた。

本人が例え望んでいないとしても、幾らも手を差し伸べられるであらう方に、彩華がそれをする必要などない筈だ。

だが、光の方の指先が、離れかけた彩華の手を追って捕えた。

「私、貴女を信じたの」

そんな言葉と共に、両手で彩華の手を握る。

久しぶりの、人の手の感触だった。

柔らかく、温かい若い娘の優しい手のひら。

あの日……最後に、触れた手は、哀れなほどに痩せて、筋の浮いた手だった。

この方と同じ年頃の娘のものとは到底思えぬような。

「また、ここに来る？」

この方は、指先までが光輝くように流麗だ。
彩華は、そっとその手を外した。

「もう、来ません」

答える。

「貴女に会いたい」

再び触れようと伸びてくる手を避けて、立ち上がった。

「私はお会いしたくありません」

会いたくない。

あまりに、あの娘とは違い過ぎるこの方には、もう会いたくない。
あの娘の哀れさばかりを思い出させる貴女には。

「私、貴女が好きだわ」

そう言って、じっと瞳が見上げてくる。

鮮やかな碧の中には、僅かにも灰色なんて見当たらないのに。

この方に、あのやせ細った娘の面影などが、あろう筈がないのに。
なのに、出立する彩華を見送った娘に、一瞬重なる。

「……貴女のこととは嫌いではありませんが」

でも、会いたくない。

「貴女の周りは騒がしい」

光の方が立ち上がる。

ずっと揺らぐことない動きに、重なった幻影が消え失せて、彩華
は内心ほっとした。

「会いに行くわ。会いたいから」

彩華は背を向けた。

「迷惑です」

一言。

そして、歩き出せば背中に声がかけられた。

「清夢！」

彩華は足を止めた。

「清夢よ……それが私の名」

名無しの後宮で名を名乗る意味を、彩華は知らない。

「貴女の名は？」

尋ねられて、彩華は振り返った。

月を背に佇む女神を、まっすぐに見据えて答えた。

「名などありません」

冷たい答えで、拒絶のみを告げた。

だが、彩華が振り返ったことに満足したように、光の方は微笑んだ。

「絶対会いに行くから……騒がしくならないように、こっそりと」
そう言う。

彩華は何も答えず、今度こそ光の方を置いてその場を後にした。

気が付けば、逃げるように走って部屋に戻っていた。

摘み取った花を寝台へと散らし、その上に身を投げ出す。

頭に残るのは、最後に見た光の方の笑み。

なんて。

美しいだけでなく、愛らしいのか。

笑みを向けられて、それを返さぬというそれだけが、あの方が相手であるなんて難しいのか。

いや、あの闇帝でさえを、魅了したというのならば。

一体、誰があの方を拒むことができるだろう。

しかし、彩華はそれを認めたくなかった。

光の方に握られた手で、ぎゅっと拳を作る。

名残を振り払い、前に触れた者の感触を探し求める。

美しく、健康な娘を愛しいと思うことは、彩華を待つひ弱な存在への裏切りに違いない。

「……っ彩雪！」

名を呼ぶ。

この香りに包まれた寝台で弱々しく、それでも彩華に笑いかける

娘を想う。

「彩雪」

思い出した姿を、重なり消し去ろうとする光の精。

頭を振るえば、それが消えて、また、みすぼらしい娘が浮かぶ。

「……彩雪……彩雪」

教えられた名を忘れようと。

彩華は、ただただその名を呼び続けた。

9 寵妃の出現

闇帝が月の室で一夜を明かし、珪心に促されるまで女を離さず、寝台を降りなかった。

この事実は瞬く間に後宮に広がった。

同じ夜、他の室で残虐な殺戮が起きていたこともまた、後宮の誰もが知ることであっただろうに。

闇帝が女の傍らで朝を迎えたことが、一人の妃の胸に墓標の如く剣が立てられていたことよりも人々の関心を引くのだというそれが、この後宮と呼ばれる場所の異常さを知らしめているようで、彩華は誰に知れぬよう一人身震いした。

ここは嫌いだった。

出たい、と願わずにはいられなかった。

それが叶わぬことは知りながら。

光の方を諭しながら、何よりもそう願うのは彩華の方に違いなかった。

二晩目。

陽が落ち切らぬ内に、その方はふらりと現れた。

まだ、寝支度を終えていなかったことにあたふたとしたのは鈴風だけで、彩華はそれを横目にその日何度目とも知れぬため息をひとつ零して、その来訪を快くは思っていないことを露わにする。

「もう少し、嬉しそうな顔をして欲しいものだが」

闇帝は面白そうに言いながら、ソファに座ったまま王を迎え入れる意志のない事を隠さない彩華へと近付いて来る。

森に棲む獣のようだ。

静かで重厚な王の動きを、彩華はそう思う。

こちらが無力な、獲物にもなり得ぬ小物と分かっていれば、このように優雅に静かに振舞うも、一たび敵意を向ければ、すぐさま牙を剥いてとどめを刺すのだろう。

昨晚の哀れな妃のように。

物言わず身動きもせず、ただ王の動きを視線で追うだけの彩華を鷹揚に受け止めながら、闇帝は傍らに腰を降ろした。

「顔色が優れんな」

抑揚のない言葉と無表情。

だが、武骨な指が、思いがけなくそつと頬に触れてきて、彩華は僅かに肩を揺らした。

闇帝は、じつと彩華を探るように見つめながら、手のひらで頬を覆った。

男の手は彩華の顔を包んで余りあるほどに大きい。

彩華が求める、か細い小さな手。

彩華が拒んだ、美しい手。

それらを凌駕する存在感を誇示しながら、氣遣うかのように肌を撫でる。

「朝から騒がしく、うんざりしております」

顔を背けてまやかしの優しさを退けようとすれば、強引に指が追ってきて顎を捕えられた。

力では敵う筈もない。

有無を言わず闇帝へと顔を上げさせられて、彩華は仕方なく促されるままに男の端正な面を見つめた。

「陛下のおっしゃるとおり、部屋に籠っておりますのに……少しも静かではありませんでした」

聞きようによっては、甘えにも聞こえるであろう恨み言を口にした。

顎を掴んでいた指が離れていく。

と、それは彩華の腰を抱く腕に変化し、強い力で闇帝の胸元に引き込まれた。

「こうして俺に愛でられる以上、それは仕方ないことと諦めるんだな」

彩華は、もう一度ため息をついた。

鈴風がそこにいることを意識しながら、身体力を緩めて、闇帝に身を任せる。

闇帝の腕に更に力が籠り、彩華は男の膝へと抱き上げられた。

包み込まれるかの如く抱きしめられて。

密着する身体は、いくら無関心を装おうとしても、強張ることは止められなかった。

「明日になれば……もっと、騒がしくなる」
たった一晚だ。

闇帝がここで過ごしたのは、たった一晚なのに。

今日一日で、一体何人の貴人や側人が、この月の室に挨拶に訪れただろう。

そして、男の言葉は、今晚もここで過ごす心づもりであることを示している。

明日には、今日以上の人々が狂騒するというのか。

男の言うとおりの仕方ないこととは思っても、その状況を思い浮かべるだけで憂鬱になった。

「誰がご機嫌伺いに参上しようと気に留めるな……お前が煩わされる程の事は何もない」

演じていると分かっているながらも、その声音は彩華を真に想うかのように優しげだ。

解き下ろされている髪を梳く指先も、驚く程に丁寧だった。

彩華は、闇帝の胸元から、身を離れた。

膝に座っても、なお上にある男の面を見やれば、これも思いがけず静かで柔らかな瞳が彩華を見つめていた。

だが、彩華はその瞳が命じるのを見逃さなかった。

「陛下がこちらにいらっしやなければ静かになります」

王の命令に従って、意識的に声音に甘えを含ませた。

そうして、自ら闇帝の胸元に身を寄せる。

どうすれば、闇帝の寵愛を受け入れたように見えるのか、正直分らない。

そう見えるように、と願いながら、大きな身体に縋るようにして背に手を回す。

「……もう、いらっしやらないで下さい」

裏腹に呟けば。

背がしなるほどに、抱きしめられて。

「無理を言うな」

闇帝が囁く。

そして、ふわりと彩華は抱き上げられた。

歩き始める闇帝が寝台に向かって歩き出す。

広い肩のその向こうに、深々と頭を下げて、部屋を出ていく鈴風が見えた。

10 闇帝と寵妃

抱き上げた身体からは、やはりあの香りがした。

甘い香り。

だが、他の女達が撒き散らすような、まとわりつく不快さはこの女にはない。

もう少し留め置きたいと願うのに、そよ風が吹き抜けるように鼻先を掠めて去っていく。

そんな、香りだ。

それを手中に納めて、望むままに堪能しながら、王は抱き上げた女を寝台に運んだ。

先ほど侍女が慌てて整えた皺のない絹の上に下ろし、間をおかずに伸し掛かったところで、背後の扉が閉められる気配がした。

侍女が出て行ったのだ。

一部始終を見ていた侍女は、暗黒王がどれほど己の女主を耽溺しているかを高らかに語るだろう。

「これで、明日からお前は闇帝の寵妃として名を馳せることになる」かつて王が二晩と続けて通った女はいない。

あの光の方、と呼ばれる女以外は。

月の方は、王が執着する妃として、誰もが一目置くようになるだろう。

身を重ねたまま、王は意図して寵妃に仕立て上げた女を見下ろした。

相変わらず臆さぬ灰色の瞳が、見返してくる。

華やかではないが、落ち着いた彩り。

穏やかに佇むそれは、見る者に安堵と信頼を抱かせるに違いない。しかし、今、王はその瞳に、覚えのある高揚感を覚えた。

簡単に押さえ込めることのできそうな小さな火種ではある。

だが、燻り始めた昂りを敢えて殺すこともなく、重ねた身体の柔

らかさによって確実に押し上げてられていくに任せる。

「そして……いずれは正妃だ」

未だ、男の欲望の兆しに気がつかぬ女は、ただ、王の言葉のみに反応した。

それは意外なものだった。

王を見つめていた瞳は、物憂げに揺らぎ、やがて、ふと逸らされたのだ。

伏せ目がちなまぶたの先、長いまつげが震えているのに気がついた。

「どうした？」

いつも、凜と見据える女が見せるどこか不安げな様子に、つい、尋ねた。

「何も……」

女は言って、王の胸元から抜け出そうと身を起こしかける。

王は、何の算段も思惑もなく、己の欲望に従い、女の肩を掴んで寝台に戻した。

驚いたように見上げてくる女の瞳に、先ほど過ぎった揺らぎはない。

迷いなく、怯えなく、まっすぐにと見つめてくる。

そう、これで良い。

王は気が付く。

どうやら、この瞳を己は格別に気に入っているようだ。

「二晩続けて通ったのだ……少しぐらいは楽しませてもらう」

言いながら、滑らかな頬に指を這わせば、女の眉が寄せられた。見つめてくる灰色に色濃い非難が混じる。

それさえも、男の欲望をただひたすらに煽るばかり。

「私など、陛下のお相手ができるような女ではありません。取るに足らぬつまらぬ者です。お離し下さい」

己を卑下する、しかしながら、王を拒否する言葉を口にする女を見下ろしながら、

「つまりかどうかは俺の決めることだ」

女の寝間着の腰紐を指に捕える。

この者がどのように考えていようと、後宮の女達が身につけるものは心もとない。

寝着であれば、それは尚更。

唯一の砦である腰紐は、引けば解け、解ければあっさりと緩んで、女の寝着の合わせが開いた。

いつかの記憶より、なお艶やかな白磁が輝き零れる。

未だ完全に名無しの国に頭を垂れることのない東方の国の者特有の肌だ。

だが、その忌々しさと裏腹に、女のそれは魅惑的に王を誘った。

いつぞやは剣で傷を付けた首筋が目眩しい。

今は、真っ白なばかりの肌に口づけて自らの証を刻み、小さな足掻きのように身を覆って隠していた生地を払う。

組み敷いた女の身が強張り、これが王の戯れではないと気が付いたかのように、もがき始めた。

「陛下！」

声にも、非難と拒否。

だが、多くの女が自ら望んでその身を差し出す中、この女の頑な拒絶はむしろ面白くさえあった。

細い身体を難なく抑え込む。

後宮では突出したものではないと評価した肢体ではあったが、胸も腰も十分に女としての柔らかさを備えている。

手の平でそれらを確認しながら、これは十分に評価に値する……今まで触れたどの女よりも滑らかな肌を唇と舌で味わう。

「お離し下さい！」

いつもの静かさを失った声。

もがくたびに、女の本意とは裏腹に、衣は乱れて肌を晒していく。煽られる。

己でも、不思議なほどに。

「嫌です！」

女の手が、肌を辿る王の手を止めようと足掻く。

肩を叩く。

胸を押す。

非力な女の、些細な妨害だ。

やがて、小さな手のひらは、女の脚を辿る王の腕にかかった。

指先に、拒絶の力が込められたのは一瞬。

女ははっとして、手を引いた。

そして、それをきっかけに、あれほどに全身で拒んでいた女が、ピタリと動きを止めた。

あまりにいきなりの反応に、思わず王の動きも止まる。

「申し訳、ございません……傷に……」

言われた言葉は、意味を成さずに王を通り抜けた。

だが、すぐに取り戻す。

女の指が一瞬食い込んだ場所は、昨夜、王が傷を負った場所だった。

そんなこと、この状況では王自身でさえ忘れていた。

この女は、いったい何なのだ。

王は、不覚にも毒気を抜かれた。

もはや肌に僅かばかりの絹を絡ませただけの、なんとも煽情的な姿の女から退くという、かつてない状況に自らを置くと、袖をまくり腕を差し出した。

「珪心が医者を呼んだ。いらんというのに、薬を塗られて、仰々しいこの状態だ」

女は寝着の前を合わせながらも、きちんと包帯が巻かれている腕を見て、明らかに安堵を浮かべた。

まったく、この女は。

自らの意志を無視して、力で組み敷こうとした男の傷を案じるとは。

「応急処置は完璧だと、医師が褒めていた」

傷の手当てをしながら『本当にこれは一国の姫君がなされたのでしょうか?』と首をひねる程に的を得ていた女の処置。

女の素姓に疑問を抱くものでもあったそこは隠して、上辺だけを告げれば、それには無表情で答えが返ってきた。

「恐れ入ります」と。

女自身、昨夜の手当てについては、出過ぎたことをしたと思っ
ているに違いない。

だが、手負いの者を放ってはおけなかったのだろう。

己の危機を招きかねないながらも、手当をせずはいられないよう
な。

己の絹を剥がされながら、それでも、傷を気遣わずにはいられな
いような。

そんな女。

一体、何者か。

いつかも過ぎった問いが、その時よりも興味を深めて王に浮かぶ。

王が動きを止めた隙に、女は乱れた寝着を整え終えて、寝台から
脚を下ろした。

「どこへ行く?」

女の腕を掴んで、それを止めた。

昨晚と同じ問いかけだ。

「……寝台はお使い下さいませ」

そして、昨夜と同じいらいえ。

王は、女の腕を掴んだまま、かといって先ほどのように強引に寝
台に戻すこともなく尋ねた。

「どこでも眠れると言っていたが」

女が昨晚口にした言葉を思い出しながら

「……どこでも眠れぬ……の間違いだろう」

その顔色を見て思った通りを口にする。

女の強かさと若さという瑞々しさにぼやかされてはいるものの、

真正面から向き合ってみれば女が疲労感に満ちていることは明らかだった。

ここまでに女を疲弊させるものがあるとは思えない。

昨夜まで、この女は王が少しばかり興味を持っている者として視線を集めてはいたが、まだ、周りは静かだっただろう。

今日は騒がしかったと言うが、それも一晩を過ごしたただけであれば、例え朝までを過ごしたという事態が初めてであったとは言え、たかが知れている。

ここまでに女が憔悴する程ではない筈だ。

いや、それは違うのか。

女は体力的にというより……様々な煩わしさに、おそらく精神的に追いつめられているのか。

しかし、皮肉なことに、その様子は。

「酷い顔色だ……それでは、俺がどれほどにお前を啼かせているのかと、つまりぬ憶測を呼ぶばかりだ」

軽口ではなかった。

女の疲れた様子は、先ほど王が故意に付けた首筋に浮かぶ情事の名残が色を添えて、事実を知らぬ者が見ればそこはかとない色香を撒き散らしているようにも見えるだろう。

「そんな憶測も……良いものではありませんか？」

女が僅かな笑みを見せるでもなく言うとおரிだった。

確かに、王の尋常ならぬ寵愛ぶりを、誇張するには良いかもしれない。

だが、どうしてか、王はその一言に少々苛立ちを覚える。

「いっそ」

掴んだままだった女の腕をぐっと引く。

女は少しだけ身体を揺らしたが、倒れ込んでくる程に力を入れていない。

「本当に啼かせてやろうか？ 気を失うまでに」

これは本気か戯言か。

正直なところ、王にもどちらとも言えなかった。

「そうすれば眠れる」

女は王の迷いを読むように、じっと見つめてきた。

雨が降る直前の空の色が、静かに王の本意を問うように。

王にその真偽を見極める時間を与えるかのように。

静かな時が流れていく。

目の前の女は、手駒だ。

欲しいものを手に入れるために、契約を結んだ者。

女としてそこに在る以上、男として本能的に欲望を覚えることはあろうが、契約に則って扱うべき者だ。

ならば、答えは。

「……戯言だ」

今はそれが本意であると、王はそう答えを出した。

「ここへ」

言いながら、女の腕を少しの力で引く。

女は、まだ少し迷うような様子であったが、力強く拒否することはない。

「どちらにしろ、朝は寵妃を抱いて目覚めねばならぬのだから」

この一言に、女は諦めたように、寝台へと上がった。

己の傍らに横たわるのを見届け、王は足元に整えられていた上掛けを引きあげて、女の身を包んだ。

王の行為に、少し驚いたように見上げてくる女を、自分でもらしくない事をしたと分かっているから、意識して無表情で見下ろす。

「眠れ。明日は……また、騒がしくなる」

女は頷き、寒いように上掛けを引きあげて身を丸めた。

まぶたが伏せられて瞳が隠れるも、今度はそれを上げさせる気にはなれなかった。

王は自らも横たわり、目を閉じた。

「……明日はもっと騒がしくなるのですね」

女は、突如、小さな消え入りそうな声で呟いた。

王はまぶたを上げて、女を見遣った。

傍らの小さな存在は、身体を丸め、目は伏せたままだ。今朝と同じく、少女のような印象を抱かせる。

己を見据える者とは思えぬ儂さが、そこにあった。

「そうだ」

答えれば、女は更に身を丸めた。

顔を絹に埋めるようにして。

「ここでは、人が亡くなったことより……陛下がこの室にいらっしゃることの方が騒ぎになる」

その通りだ。

この後宮で、何よりも重要なことは、王がどの女に興味を持ち、手を付けるのかという、そのみだ。

己が昨夜この室で、夜を明かさなければ、さすがに血生臭い話題で持ち切りにもなっただろう。

だが、ここで闇帝が女を抱いて目覚めたことにより、それはあまりにあっけなく一転するのだ。

残虐に殺された女より……しかも殺したのは王だと証さえ立てられていたのに……それよりも、新たに王が召した女の方が、人々の興味をそそる。

ここに住まう者達にとって、それは当たり前だ。

「満足か？」

事は契約通りに進んでいる。

このまま、順当に進めば、王も女も望むものを手に入れる。

だが、問い掛けに女は、驚いたように伏せていたまぶたを上げて、見上げてきた。

そして、その女の反応を意外に思わない己に、少し驚いた。

「……いいえ」

少し間を置いて、答えが返る。

「いいえ」

もう一度。

そして、何かを堪えるように、女はまぶたを下ろした。
先ほどと同じように、まつ毛が震えた。

「お前は、まともだな」

そういうことか。

この女はまともなのだ。

「陛下？」

王は女の身を引き寄せ、己の胸元へと乗せた。

驚く女の顎を捕え、まっすぐに瞳を覗きこむ。

「恐ろしいのか」

この女は、後宮の異常さに気がつき、それを恐いと感じる。

それは、この世界に紛れこんだ者が、そこに狂わされることなく、
正気を保ち続けている証に違いない。

「だが、お前が望んでいるのは、そんな場所の頂点だ」

そして、これもまた事実。

この女が望んでいるのは、この後宮の頂点たる正妃の座。

狂った世界に怯えながら。

そこを支配する玉座を望むのか。

「承知しております」

女は、王を見つめたまま、頷いた。

そこに迷いはない。

望むものを手に入れんと、手を伸ばす姿は消えることなくここに
在る。

この強かさを美しいと思ったのだ。

それに間違いはない。

「……承知しております」

女は王から顔を背け、今度は力なく呟いた。

そこにいるのは、弱々しい……だが、まともな人間。

狂った世界の中、震えながらも、正気を保とうとする姿も、また、
哀れで美しい。
そう思った。

やはり、この女が欲しい。

ふと、再燃した欲望を、王は契約に従い押し殺す。
宥めるように髪を撫でる。

肌と同じく、それは指に一瞬として引っかかりを与えず滑らかだ。

「……陛下……お離し下さい」

いくらか経たぬうちに、女は言って、身じろいだ。

これ以上は好きにできぬ身体は、しかしながら、離し難く。

「大人しくしている」

言って、腰を抱く腕に力を込める。

女の視線に非難と、そして、もう一つが過ぎる。

「このままでは陛下が眠れません」

また、氣遣われた。

他の女も、もちろん王である己に氣を使い、氣を引こうとあらゆる言葉を操る。

だが、この女は、男を遠ざけようとあしらいながら、ついと内から優しさが零れ出る。

「……このままで良い」

王は再びまぶたを伏せた。

「お前の香りは……良く眠れる」

女の髪に顔をうずめ、その香りを胸まで吸い込む。

欲望を煽る香り。

眠りに誘う香り。

女と同じように、様々な貌を持つそれが、身体を包む。

女はしばらく強張っていたが、王の腕が離れる意志を欠片も持たないことを察したのだろう体の力を抜いた。

胸に寄せられる重みが心地良い。

「……おやすみなさいませ」

声が掛けられる。これも昨夜と同じ。

臣下に告げられることはあっても、女にこの言葉を掛けられたことはない。

闇帝は、通った女達の元で眠りに就くことはないから。

「ああ。おやすみ」

答えると、腕の中の身体が一瞬、ほんの僅かに強張った。

己の挨拶が意外だったか。

そうだろうとも。

王自身も、つい返してしまったことに驚きを禁じ得ないのだから。

やがて、抱いたままの身体の重みが増し、胸元で規則正しい呼吸が聞こえてきた。

眠りに就いた身体の体温が少し上がったのに伴って、昨夜と同じ香りが……いや、己の血の香りが混じらぬ分、ひと際色濃い女の香りが王を包み込む。

心から手離すのが惜しい香りだった。

この女は手駒。

そう思いながら、思いがけなく湧きあがった執着心に王は戸惑った。

眠りに就く寸前に思ったのは……この女は抱いてはならない。

抱くべきではない。

抱けば、手に入れんとしているものを取り零す。

そんな事だった。

そして、女が頑なに己を拒む理由もまた……少し理解した気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5609t/>

名無しの国に咲く花の

2011年11月13日13時58分発行